

そんな政府に連れて行かれる自衛隊員も気の毒だ

「国連平和維持活動」について少しおさらいがしたいのですが。

橋爪● ある国が、自力で国内の平和・秩序を維持できなくなってしまった時、やむをえずその国が入って行って、その国の国家主権（の一部）を代行する。状況によっては警察力・軍勢力を背景にせざるをえないのですが、医療・福利厚生など、本来ならその国の政府が果たすべき役割を果たす。そうやってその場をしのぎ、その国の正しい政府が再建されて市民の権利が守られ、秩序が回復できるように混乱状態の收拾をはかる活動。これがPKOなんじゃないかな。

PKOはバンソウコウ

—そう考えると、PKOは必要なこと、ということになりますね。

橋爪● そうですが、あくまでもこれは応急手段です。バンソウコウみたいなものです。

人間は裸で生きるわけにはいきません。自分の生きる社会に、まとも（殺）を与えない必要がある。それが国家で、その殺は誰かが勝手に破ってはいけぬものなんです。国家と国家は、その殺（主権）を尊重しあう。人類は当然、こうした国家の殺に分かれて暮らしていくほかにない。

そういう国家のひとつが、たまたまつぶれてしまったら、どうしたらいいか。もうこれは人道問題ですから、別の国家が救済の手を差し伸べて、もう一度元の主権国家に戻してやる。国連は民族自決を前提にしていますから、こういう活動をする義務があるわけです。

—それに参加しなかった日本は、近代の世界史の中でどのように位置づけられるでしょう？

橋爪● 日本は昔、ひどい植民地経営をしました。それは思い上がりで軍隊なんて持ってたから、ならいっせいの所持はいいということになった。それを「自衛隊」という名前でごっそり持たせてもらったんです。ただし正式な軍隊ではないから、国連軍に参加できない。日本は一人前でないというわけで、誰も声をかけてくれなかった。日本もそれを喜んでいた。もう一度戦争になったら嫌だから。でも喜び方はだんだん変わって来て、軍備なんかない方が経済が調子がいい、という話になった。みんな鉄ゲタを履いて走っているのに、日本だけ運動靴で歩いていいやという、経

橋爪大三郎氏に聞く
PKO問題が私たちに残した宿題

聞き手：ぬでしまあきこ

『冒険としての社会科学』（橋爪大三郎著）は私にとって、物事を考える時には道筋があって、特に社会的な出来事を順序よく理解し、自分なりの答を出すとする時にはどう学べばよいかの方法を示してくれた書物です。

実感としての政治に対する居心地の悪さや正しいと思うことは、多くの場合、言葉にならずにしましこまれ、時がたち状況に慣らされてゆくうちに薄らいでゆくものです。実感を「言葉」に置きかえ確かめあう中で、「こんな世界に住みたないね」と夢を語り合う機会が増えることを願って、インタビューをしてきました

済大の喜びですね。そのあたりがだんだんバテてきて、「音のようにみんながやっていることをおまえもやれ！」と言われてしまったんですね。—言われたから「じゃあ」という、今の日本の政府のやり方はあまりにお粗末なのでは？

橋爪● 自衛隊と憲法の問題がすっきりしていない。それに、国内の議論もまったく進んでいない。「自分から戦争をしかけない」、という点では国民の合意があるけど、よその国が混乱に陥たらどうするかという点になると、何も考えていない。一から議論しないのだめですから、当然いろいろな意見が出てくる。誰もどうすればいいかわからない状態なんです。そんなわけで国内の合意がないのに、合法的にやらないといけぬから、政府は無理な法解釈でとりつくろうとした。その辺で混乱しているんですね。それにしても、自衛隊が国連の指揮下に入るのか、あくまで日本政府の一部なのかは、一番基本的な問題だ。国連に協力するのなら、国連の指揮下にあるのは当然のこと。危険になったら各国政府の判断で逃げ出すなんて、ただの鳥合の衆でしょ。「自衛隊員の生命を保障する」と言っているようじゃ、まるで基本がわかっていない。

そういうあいまいな作文で切り抜けようなんて、国民を欺く行為です。そんな政府に連れて行かれる自衛隊員も気の毒だ。参加する以上は、国連にきちんと協力する。参加しないのであれば、その理由をきちっと言う。国連は、多少の不公平

はあるけれど、いまある唯一の平和の枠組で、町内会みたいなものだから、何も挨拶なしというわけにはいかない。

—「日本」らしく挨拶するとすれば、どのような言い方が考えられるでしょう？

橋爪● 各国の政策や外交は、世界共通の事情で動いているわけだから、日本だけに特殊な事情があるわけではない。人が死んで悲しいのも戦争になって困るのも、どこの国も同じで、あまり日本だけの事情を言わない方がいいと思います。—憲法第九条を有する国としては？

橋爪● それはひとつの言い分になります。第九条というのがあるって、憲法上できません。

ただこの場合、自衛隊は憲法違反でないのかとか、憲法を改正する気がないのかとか、逆に問われます。そもそも世界中が憲法第九条を採用したら、PKOもPKFもできなくなってしまう。弱い国の民衆を見殺しにするということになりかねません。それを人道にもとと考えると、日本として何も考えなくてはいいのです。そういう議論をする覚悟であれば—必ずその議論になります—、「憲法上できない」と言うのは正しい。

世界に通用しない日本流

自分を守る以上のことを語らないと、市民社会は成熟しない



橋爪大三郎氏（はしづめださぶろう）
1948年生まれ。現在、東京工業大学で社会学を教える。著書に『冒険としての社会学』（毎日新聞社刊）ほかがある。

問わるのであれば、今までのやり方を反省して、議論を通して納得していく方法をとるべきです。それにはまず国内でもっとたくさん議論して、自分達がまず変わら、その上で日本人の感性豊かな部分を、議論のかたちで外国に伝えていく、という順序でしょう。

議論をする場合、まず友達が相手ですが、そこで終わると世論にならない。友達と話して自分の誤りをただし、ある程度自信が持てたら、今度は考えのまったく違う人にその結論を投げかけていく。これが大切です。で、知らない人にどうやってアプローチするか。マスメディアに投書するとか、自分で考えをまとめて本や雑誌にするとか、いろいろ方法がありますが、その場合もまったく違った人々の目に触れることが大切です。それから、議員に手紙を書く。これは世論を政治につなぐうえで大変有効だ。一般の有権者から十通二十通と手紙が来れば、議員は考えますよ。ある問題にひとつ発言するだけで、票が入ってくるならお金はかからなくて簡単だ。議員にして、従来の集票マシンと無関係の人々の票をどうやって集めるかわからなくて困っているの、向こうからやってくる有権者には前向きです。都市型の保守系議員、あるいは革新系議員、何でもいいですが、市議会のレベルなら数十〜数百票が当落を分けますから効き目はあります。

政治に影響を与えなければ、まずネットワークが十分広がっていることが大切。そして、特定の政党にこり固まるのではなく、「私達はこう考えるが、あなたは どう考えますか、もし接点があれば、今度の選挙で投票しますよ」というスタンスでいく。そのスタイルがあちこちのグループで成功すれば、ますます影響力は増すでしょう。—政治家=ハゲ頭=頭固い、のイメージが拭えないのですね。

橋爪● 皆さんの頭が柔らかなのはわかります。でも、そういう生活実感を正しい議論に組み立てて代弁してくれる人を探す努力をしないと、いつまでたっても政治はよくならない。専門知識のある代弁者として、広瀬隆さんは成功例だったでしょう。政治の分野でも、政府の御用学者よりレベルの高い代弁者も出てくる必要がある。

右手と左手の両方を

—PKOについて、世論として語り上げてゆくべきことは？

橋爪● 政府のPKOでできること、個人一人一人ができることがあります。国がやらなくても、個人ができることがあるのを忘れてはダメだ。言わば、右手と左手のようなもの。両方を差し延べないと、教えるものも教えなくなる。

以前、難民輸送のため、ヨルダンから飛行機を飛ばそうという話がありました。あれは個人でもできたでしょう。なにもしないで自衛隊機を出さなくても、安い民間機を飛ばせばよかったです。そういうことをきちんと調べることも大切です。保健医療とかなら、民間でできることも多いわけですよ。それが本当のPKO。自衛隊の海外派遣反対…というだけの運動では、自分を守る運動にしかならない。日本人が自分を守ってばかりいては、エゴイストと言われてもしょうがない。よその国が治安が乱れて困っている時、その国の人々をどうやって守るか、なんてですね。武装ゲリラが現に、民衆の生命・財産を脅かしている。それをどうするかという発想がない限り、この議論はダメです。自分を守る以上のことを語っていかないと、市民社会は成熟していきません。

この問題は、今まで議論がなされていなかったわけだから、一夜漬けになるのはまあ仕方ない。それなら試験が終わっても、ずっと勉強を続けていけばよいです。

輸入食料品を日常的に口にし、外国音楽も容易に耳にできる現代の日本では、とすると難しいと思われる世界情勢の事や政治の話も、ひとごとではないことがよくわかると思います。難しい、馴染みませんが、「なんで！これわからない？」と疑問に思う気持ちを閉ざしてしまわないようにしないといけないなーと、つくづく思います。わからないことがあったら、隣の人にもまず聞いて見て下さいね。そして、多くの人に、このインタビューは、「地球の上でみんなが生きてゆくために、軍備というのは本当に必要なのか。もし軍備をしないでそれぞれの人が生きてゆくとしたら、どのようなシステムが必要か？」他、まだまだ続きがあります。興味がある方は、アマナクニかぬでしま。

リマ・クッキング・アカデミー

- 開校以来22年間、自然と人間を大切にきたマクロビオティック料理教室
- マクロビオティック（長寿法）の創始者・桜沢如一氏夫人・里真先生（93歳）の指導による
- 人がヒトになるための食べ物と食べ方、生き方を自分自身で自由にコントロールできる
- 初級：水曜（10:00~14:00、18:00~20:30）、土曜（10:00~13:00）
- 中級：月曜、上級・師範：火曜 各1回/¥3000
- 英会話による料理教室「Noriko's Macrobiotic Cooking Class」もあります。（第3土曜 16:30~19:30）
- 詳しくは日本C1事業部・澤田、石川まで

日本C1協会
〒151 東京都渋谷区大山町11-5
TEL. 03-3469-7631 FAX. 3469-7635
（小田急線・東北沢駅下車徒歩2分）

フリーアルバイター
健康なる男女
おじゃりやれ!!
その昔、自給自足の生活を営んでいた八丈島の「焼煙文化」を今日的に創造する事業に取り組んでいます。アシタバの栽培、加工、炭焼、赤カブ漬物等、日給・試用期間後6~11千円。寮あり、演劇、太鼓、酒 等……。希望者は現況、年令、スナップ等、簡単なメッセージを郵送で下記へお送りください。〒110-14 東京都八丈島八丈町 大賀郷楽部 ☎04996(2)1816

未来永こう舎

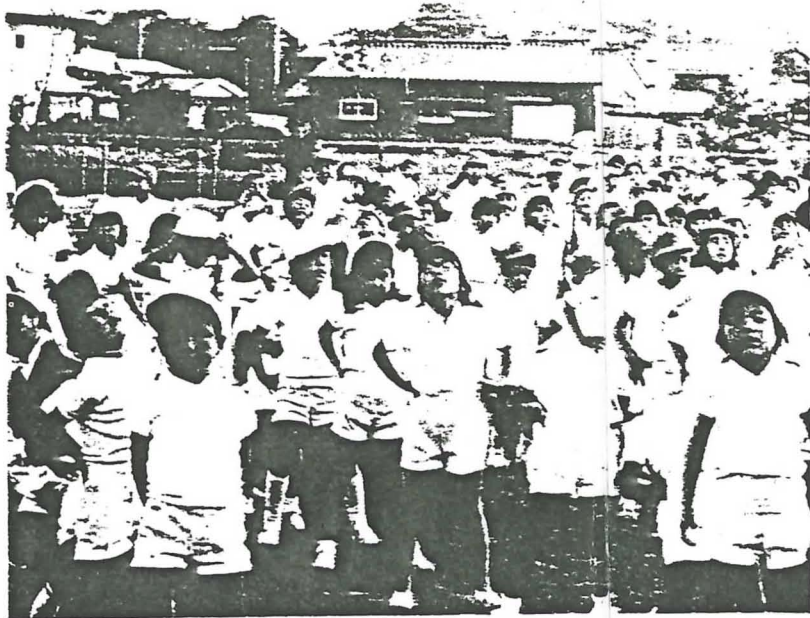
Ethnic & Primitive Arts
彩文舎
SAI MON SHA
We are proud to present our collection of Ethnic Crafts and Art Objects from Africa, The Middle East, Asia & South America.
Textiles of Dyed, Hand Woven, Hand Embroidery, Splazaged Patterns, Slaves etc.
Café: 1-2-1, 102 Hironosho, Isonami-machi, Inaba-gun Chiba-ken Japan 〒280-02 Gallery: Phone No. Fax: 0476 921 2661 290-27 Hansuokuten Natsu-shu (Ishikawa, Japan 〒728) Phone: 0122-22-3291

一ツツ本作りを素材の糸の結びが作るアジア、アフリカ、中東、中南米の、織、刺繍、染色、法技術等々スニークでアフリカのアートコレクション。

LEGALIZATION OF MARIJUANA !!
Q. Does Marijuana Lead to Crime and/or Hard Drugs?
A. No. The only crime most marijuana users commit is that they use marijuana. And, while many people who abuse dangerous drugs also smoke marijuana, the old 'stepping stone' theory is now discredited, since virtually all of them started out 'using' legal drugs like sugar, coffee, cigarettes, alcohol, etc..

Harvest Market
2-1-64 Nakadera Chuo-ku Osaka city 542 Japan ☎06-765-3953
2-13-17 Kishi-shinsaihashi Chuo-ku Osaka Japan ☎06-212-2511

校庭で体操をする子供たち。子供にとって、学校は最初に経験する社会集団だ。



規則が10に増え、内容もどんどんエスカレートする。本当は少しも守る必要のないような規則をどんどんこしらえてしまい、肝心の「規則を守ろう」という生徒の意欲をだいたしにしてしまう。

社会に通用する校則か 管理のための校則か

どうしてそういうことになるのか。

それだけに、社会の成り立ちやしぐみを知ろうとする研究意欲はどんどん増え、大学で「比較宗教社会学」「テクニカルライティング（理工系の作

A PROACH 1 社会学

民主的な社会のルールを考える



橋爪大三郎

東京大助教授

1948年、神奈川県生まれ。東京大文学部社会学科卒業。同大学院博士課程修了。'89年より現職。主な著書「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」（ともに勁草書房）ほか多数。

機能集団としての規則は必要だが、それが細かすぎる

校則は学校という社会のルールであるということから、社会学者として校則に関心を持つのは橋爪先生。先生によれば、集団生活（社会）をスムーズに行うために、ルールは本来なくてはならないもの。めいめいが独自の考えで勝手な行動をしていては、エゴが横行して社会集団としてまとまりがつかなくなってしまうからだ。そこで、学校にもルールが必要となる。これはもちろん、学園生活をキチンと送るための規則だ。「例えば、始業時間を朝の8時30分にするとか、授業時間は50分まで6限あるとか、昼休みは4限目が終わつた後に40分間とか」。こういう規則は当然必要です。のんびり昼ごろ登

先生のおすすめ BOOK

『民主主義は最高の政治制度である』橋爪大三郎著
現代書館（2000円税込み）
私たちが言説使っている民主主義という言葉は、私たちの想像以上に思想の奥行きを持っている。橋爪先生は専門の社会学の立場からこの問題をとらえ、民主主義がどのように優れているかを指摘する。校則と民主主義を考えるうえで原点になる書物だ。

『校則の研究』坂本秀夫著
三才書房（1750円税込み）
校則は、生徒の全意と理解に基づいて成り立つべきもの。それが実際には、先生が生徒を管理して取り締まるための、一方的な押しつけになっている。そこで本書では、校則を生徒の人權・権利の視点からとらえ、個人の人権がいかに大切であるか、その差を訴え、現状の克服についての模索と、展望を示している。

先生は次のように解説する。

「我が国には、集団」といって、その集団だけしか通用しない独自のルールを作ってもいいとする伝統があります。例えばある運動部では「オス」といさつしなければならぬとか……。本当なら、学校で守るルールは、一般社会に出てからも役に立つものでなければならぬはず。しかし、現実には学校でしか通用しない規則が、

校したり、途中で帰られたりしては授業になりませんから」

生徒にとって、学校は最初に経験する社会集団だ。ということは、学校とは勉強を教える所であると同時に、社会に「決まり」が必要だということも学ぶ所でもある。

だが、問題は「決まり」の中身である。中学や高校なら生徒会という組織があるが、現実には生徒はほとんど入れ替わるので、規則は生徒会ではなく学校当局、つまり先生たちが決めることになる。ここから問題なのだ。橋爪先生は強調する。「日本の先生はどれもがんびりすぎるようです。つまり、生徒に規則を守らせることに一生懸命になりすぎて、規則を守れば守るほどよい生徒である、という指導になります」
三つある規則が五つに、五つある

先生の「熱心さ」のせいとほとんど増えてきた」

そんな深刻な現状で大切なことは、規則が必要なことを認め、なおかつくだらない校則を見抜く目を養うこと。

その規準はというと、「この規則は、大人になっても従わなければならないものかどうかを見極めてください。あるいは、生徒だけがなく先生も従うべき規則であるかも考えてください。そういう規則なら、守らなければいけません。例えば時間を守るとか、人に迷惑をかけないとか。その一方でスカートの丈やひだ、頭髮の長さがどうかというの、先生が生徒を管理するための校則ですから、生徒会などで大いに問題にしていくべきものだと思います」

それが、校則を主体的に考えることになると思う。

だれのための社会なのか 高校の体験が現在につながる

橋爪先生が校則の問題に関心を持っているのは、自らの高校時代が原点になっているようだ。「私立校だったので、応援団とかがありましたね。校則とは違いますが、いろいろうるさかったのです。どうしてこうなるのか、ヨソはどうなのかなど、広く社会を勉強してみたい気になり、現在の研究につながっています」

幅も広くなります。いずれにしても大切にしているのは、自分たちの社会の研究なんだ」という視点ですね。明快に結んでくれた。

わが大学の先生と語る

橋爪大三郎

東京工業大学

「すごい」の一言



略歴(はしづめ だいさぶろう)

1948年、神奈川県生まれ。東京工業大学工学部助教授。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。社会学専攻。大学院修了後、執筆に専念。1989年3月より現職。

〈主な著書・共著〉

「言語ゲームと社会理論—ヴァイトゲンシュタイン・ハート・ルーマン」、
「仏教の言説戦略」、
「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)、
「はじめての構造主義」(講談社現代新書)、
「冒険としての社会科学」(毎日新聞社)、
「民主主義は最高の政治制度である」(現代書館)、
「現代の預言者・小室直樹の学問と思想」(弓立社)、
「試されることば」、
「照らし合う意識」(JICC出版局)

座談会メンバー

加藤 丈典 電気・電子工学科3年
片山 健夫 電子物理工学科3年
石井 鉄也 物理学科2年
太田 正幸 情報科学科2年
田中 道信 情報科学科2年

柳 輝一 生命理学科2年
小林 靖知 第7類1年
高橋 則行 第5類1年
藤原美貴子 第7類1年
池田真由美 電気・電子工学科2年

対談を終えて

橋爪先生のお話を伺うのは私はこれが初めてでしたが、噂に違わず、難しい社会学のお話を一つ一つ丁寧に話してくれました。一番感じたのは「すごく頭の切れる先生」ということです。しっかりと予備知識を持って話を聞かないと、その無限とも言えそうな先生の考えに圧倒されること間違いなし。事実、私も半ば圧倒されてしまいました。
加藤丈典

先生の学生時代の社会あるいは社会学に対する考えを聞いて、今の自分はほとんど何も社会について考えていないのだなあと痛感した。これを当時の社会背景の違いだけで片付けていいのか疑問が残る。これを機に社会についてもう少し考えてみようと思う。というわけで取りあえず真剣に考えて参院選に投票しにいきますよ。
柳 輝一

先生の研究なさっている社会学について、今まであまり興味を持っていませんでした。でも今回の座談会に際していくつかの著書を読み、また先生のお話を聞いて、社会学というものが多少見えてきました。視野も広がったような気がします。
石井鉄也

東工大に入る前は科学の絶対性を信じていた。入ってから、かえって多くの先生方に科学の絶対性を否定された。あらたに信じる指標はなんだ。人生への不安、世界への孤独…と、そこまで深刻ではないけれど、とりあえず人文系をやってみようと思った19の春。そして今日、東工大生も人文系をめんどくさくやらなくてはと痛感。でも、やはり人文レポートはめんどくさいと思っている19の夏。あついで夏。
小林靖知

以前読んだ橋爪先生の本が好きで、座談会は非常に楽しみでした。社会学の分野は非常に広く、世間のいろんな事柄を取り上げ論じ、そこから一つの理論を構築してゆくということは、理系の私にとっては未知のことで、非常に興味がありました。社会を学ぶために始めた社会学が、いつのまにか自分の人生になってしまう——それほど社会学とは魅力あるものなのだろう。
高橋則行

社会に出るための前勉強が……

加藤 先生は社会学を専門になされているようですが、社会学と先生との出会いというのは、いったいどういうことだったのでしょうか。

橋爪 社会学という学問があることを知ったのは、将来何になろうかと真剣に考え始めた高校2年ぐらいの頃でした。まず自分が、理系に向いている人間なのか文系に向いている人間なのかということを考えてたのです。そこで、大学でどういう学問をやっているのか知らなくちゃと思って、いろいろ調べてみたんです。大学の授業を先取りして教えてくださるといって高校の物理の先生の、塾みたいなどころに行ってみたら、さっぱりちんぷんかんぷん。自分はいくらも向いてないなと思えました。いっばう図書館へ行って、政治学とか経済学とかの棚をいろいろ見て歩くと、どうにかわかるじゃありませんか。そこに社会心理学とか社会学という棚もあったんです。

小林 そこで社会学が面白そうだと？

橋爪 いや、一番簡単で、私でもできそうだった(笑)。それはまあ半分冗談ですが、私の発想の延長上で素直にもの考えていけるなと思いました。無理が少なかったですね。それで大学で社会学を勉強することに決めました。

加藤 それからはずっと、先生は社会学を勉強されているのですか？

橋爪 そうなのですが、高校の頃社会学が面白かったからといって、まさかそれで専門家になろうと思ったわけでもない。でも大学の4年間勉強して、それで終りにしてしまうようなつもりもなくて、ずっとそういう学問に関わっていければいいなとは思いました。

小林 それでは先生は何の仕事をやろうと思っていましたか？

橋爪 サラリーマンはつまらなく思えたし、サラリーマン以外にどのような職業があるかと考えてみても、イメージが湧かなかった。社会に対して、特に当時の日本社会に対して、非常に異和感があった。よくわけのわからない社会に、何の用意もないままわっと飛びこんでい

私の読書 —読んで一言—

「思索と経験をめぐって」

森有正(講談社学術文庫/380円)

すばらしい思想家である氏が経験と体験について説明している本。人間の生き方について考えさせられる実用的な本でもある。他に新書で2冊出している。

(札幌学院大学/松井新世)

「狼たちへの伝言」 落合信彦(小学館/1000円)

衝撃を受けた人から紹介された友達が紹介してくれた。無気力・くだらない毎日から抜け出せる刺激剤です。特に男のかたに読んでいただきたい！もっと強く、夢をもって!!

(新潟大学/能山由加里)

原稿欠落

2011年11月30日

『読書のいずみ』通巻52号 p.24

1992年秋期号

全国大学生生活協同組合連合会

1992年9月発行

原稿欠落

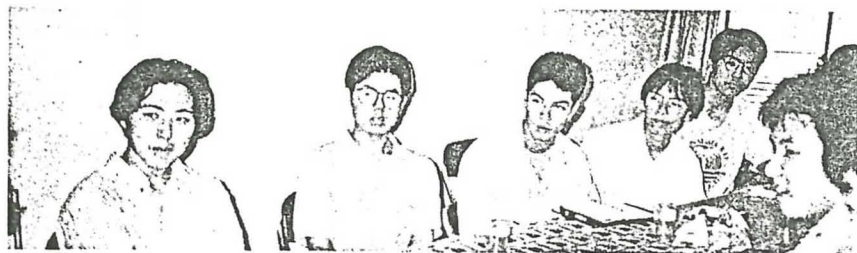
2011年11月30日

『読書のいずみ』通巻52号 p.25

1992年秋期号

全国大学生生活協同組合連合会

1992年9月発行



があって嫌だなというタイプの学生さん。もう一つのタイプは、理科が好きで来たんだけど、決して文科も嫌いじゃない。文科のことだって勉強したい。だけど大学に来てみたら、実験だ物理だ数学だと、そういうのばかりで、どこに文科があるんだ。私はいびつ人間になってしまうじゃないか。だから、人文の時間が楽しくてしょうがない。もっとあればいいのというタイプの学生さん。

藤原 やっぱり私の周りには、人文はちょっと…という人が多いですね。

橋爪 うん、もし学生さんの要望に合わせるならば、人文なんかみんな選択にして、好きな人が聴きに行って、嫌な人は全然聴かなくてもいいことにするのが一案ですね。そういうことから言えば、社会学なんか東工大の学生さんに教えて何の意味があるという議論も成り立ちます。だけど、学生さんはとかく目先のことだけを考える。将来のことというのは未知数だから、まだ分からないわけだ。

加藤 確かにそうですね。

橋爪 皆さんは専門家になるための専門教育を受けているんだけど、そうすると文科は邪魔な要素に見えるかも知れない。だけど、専門にとって本当に有益なものは、専門以外のところに転がっていることが結構よくある。

藤原 先生が東工大で教えられていて、専門外のことから影響を受けているということはあるですか？

橋爪 残念ながらなかなかチャンスがなくて。まず人文に限って言うと、私の担当している講義の日と他の先生の担当している講義の日が同じだから、物理的に覗きに行けないんです。特に何かチャンスがな

最新著書の紹介

さて、本文を読んで社会学、橋爪先生について興味を持った人、もっと詳しく知りたい人のために先生自身に最新著書を2冊紹介して頂きました。橋爪 専門と多少離れるかもしれないんですが、「民主主義は最高の政治制度である」というタイトルの論文集、もう一つは私の先生である小室直樹という人について書いた『小室直樹の学問と思想』という本です。少しずつ専門とは離れるんですが、密接に社会学と関係があることなので、それを簡単にご説明しましょう。

「民主主義……」のほうは去年書いたものが多くて、テーマは湾岸戦争とか、そうい

うふうなことで依頼があったり、いろいろな機会に書いたものをまとめたものです。

「小室直樹の学問と思想」は小室さんの主張を借りてよくのあるものの見方というものを述べているんです。

小室直樹さんという人の経歴を簡単に言うと、理科系の人で、京大へ物理を勉強に行ったんですが、数学科を卒業した後、阪大の大学院で経済を勉強して、それからアメリカで社会学とか心理学なんかを勉強して、日本に帰ってきて東大の政治学研究科で、政治学の法学博士になって、それから社会学者になったという人なんです。

いと難しいみたい。だから、同じ大学にいるから刺激を受けるということはないですね。むしろ、他の分野のものを本で読んだほうが早いかも知れない。

加藤 先生の授業をとっている学生なんかからは……。

橋爪 うーん……(笑)。学生さんはまだ専門家になる一歩手前だからな。もちろんいろいろ啓発はされるけれども、こういう学問があったのかと教えてもらったというのはまだないな。それは、教えてくれない学生さんも悪い。

日本の大学は変わる？

—学生であることはチャンスなんだ—

橋爪 日本の「大学」というのは、名前が悪いんです。小学校があって中学校があって大学があると、どうしたって小、中、大と一列になっているように思うでしょう。でも、高校までの学校と大学とは全く違うもの。大学というのは世界中にある。大学というのは世界レベルのもので、世界共通の学問を学ぶところなんです。

田中 私の持っているイメージでいうと、大学の教育程度というんですか、大学は知識のサービスセンターみたいになるんじゃないかなと思っています。そうなればもっと積極的に学ぶべきものがあるのではないかと。

橋爪 私個人の意見としては非常に賛成で、日本では高校も大学もそうだけでも、入学すると、卒業するであろうという社会的期待が非常に強いわけ。だけど、アメリカがやっているみたいにキックオフの制度を取り入れるならば、入学試験はなくせるし、その代わり1年生の入学定員の1/2ぐらひは春学期で消えてなくなる。卒業するのは、1/3ということを感じなければいけない。そういうことに社会的合意ができるならば、そのほうがいいと思いますよ。

田中 でも途中で学校やめて、学生でなくなると、自分の身分がなくなっちゃいますよね。

橋爪 そう、今だと学生ということが身分になる。身分になるから権

私の読書 —読んで一言—

「トニオ・クレエゲル」

トーマス・マン(岩波書店/204円)

トーマス・マンの自伝的要素の濃い物語で美しいものへの憧れとそれには程遠い自分に劣等感を感じる青年の心の動きが切々と語られていて、胸がつまりました。この作者の本の中では最も共感し、考えさせられた本です。(日本女子大学/磐上佳世子)

「愛する人へ贈る言葉」武田鉄矢(小学館/1068円)

第16章。「がんばれ」と声援するのは重圧ばかり、人を励ますなら「リラックス!」というのが正解、ハッとさせられました。大事なときに力んで力を発揮できない私のような人々に非常にためになりました。

(西南学院大学/石井陽子)

「ワニはいかにして愛を語り合うか」

日高敏隆・竹内久美子(新潮文庫/320円)

私達には、自分の気持ちを伝えるために言葉があるけど、言葉があるからかえってうまく気持ちを伝えられないということもでてくる。人間のような言葉を持たない動物達は、じゃあどうやってコミュニケーションしてるんだろう、って疑問を持ったらこの本をどうぞ。身近な動物達がいかに頑張って気持ちを伝え合っているかが書かれてある興味深い本です。

(北海道教育大学/尾崎千恵)

「グローイングダウン」

清水義範(講談社)

清水義範のバスターミッシュ小説は、文句無しにとっても面白い。でも、ここで私のオススメ活は「また逢う日まで」って青年とおばあちゃんのラブストーリー?!(この短編集の最後に収められている話)この本を読んだあと、尾崎紀世彦の同名の歌を聞いてor歌ってみて下さい。切なくなるよおー。(東洋大学/柿沼幸)

利があって、卒業する権利を保障しろという話になっちゃう。そうじゃなくて、学生であるというのはチャンスだと。サービスを受けるチャンスというふうに考えれば、もっと話は単純ですっきりする。私はそのほうが好きです。

高橋 日本の大学制度は変わりませんか。

橋爪 変えれば変わる。変えようという意見の人が多くなればいいんだもの。

高橋 なりますかね。

橋爪 なりますかね、というふうに言ってる間は変わらない。

田中 やはり小、中、高とかなり決められて、みんな同じように育てられているところに、ポーンと大学だけ別だと考えては行かれないんじゃないかと思うんですけど。

橋爪 そうだとしたならば、小、中、高も変えないといけないな。

加藤 日本の国民性も、かかわってくるんでしょうか。

橋爪 そうそう。国民性というのは、社会学のテーマの一つでもあるのですが。言葉をかえて言うと、「人間の発想と行動様式を規定している要因は何か」というのを突き止めるのが社会学なのです。いま、国民性に支配されているという仮説をあなたが出した。それじゃ国民性は、いつつくられたのか。国民というのは世界中共通なんじゃなくて、何かの条件によって国ごとにつくられるのでしょうか。その条件を突き止めて、そこを突き崩してやる。その国民性としての歴史や地理的環境を丁寧に壊していけば、必ず壊れるだろうと思うんですね。なくなればいいと思うだけでは壊れないな。

田中 その壊れる要因というのが日本にあると思いますか。

橋爪 あると思うよ。いろんな要因がある。社会ってどんな場合でもそんなに固定的なものではない。例えば子供が生まれなくなって、おじいさんおばあさんばかりになってごらんささい、どこの大学だって社会人大歓迎になる。そのことだけだって、たちまち変わるんです。一同 今日本当はどうもありがとうございました。

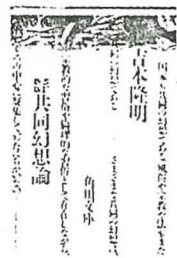
(対談日1992年7月15日)

本を書くときの秘訣 ……それは二重人格

柳 先生の「冒険としての社会科学」を読んでいて、たいへん面白いなあと思ったのですが、とくに読み手を引き込むような書き方がしてありますよね。やっぱり、読者の対象を決めて書いているのですか？また、秘訣とかあるのですか？

橋爪 私も子供から大人になってきたわけで、その途中で未解決のまま残っている部分がたくさんあるわけです。だから、自問自答というスタイルだと思ってくればいいんです。例えばこういう知識を得た結果、こういう考えに至ったということがあったとすると、そういう知識を得る前の段階というのが、自分の中を探せばどこから出てくるわけだ。そうすると二重人格になっちゃうでしょう。そこで対話ができる。だから、具体的な読者層をイメージしているのはちょっと違うと思う。書くときには、まず自分に分かるように。自分というのは、今の自分ではなくて、ちょっと前の自分でもいいし、もっと別な人生を生きるかもしれない自分に向かって書くということでもよいのです。柳 じゃあ、書こうとしていることが分からなかった自分に戻るといことになりませんか。

橋爪 そういうことかもしれませんね。



経済学・哲学草稿



◆推薦図書

哲学探究

ヴェイトゲンシュタイン 著

●大修館/3,500円

高名な現代哲学者の主著。主にここで、言語ゲームの考え方が展開されています。慣れないと読みにくいかもしれないが、エイリアンがやってきて地球の生物について理解しようとした本だと思うと、すらすら読める。

野生の思考

レヴィ・ストロース 著

●みすず書房/3,800円

構造主義の創始者、レヴィ・ストロースの主著。神話が、荒唐無稽なナンセンスではなく、人びとの「神話的思考」の美しい結晶であることを論じていきます。第三世界の人びとに対する優しい眼差しがここにある。

経済学および課税の原理

リカルド 著

●岩波文庫/品切れ

マルクスの「資本論」の種本であると言ってもよいこの書物には、天才リカルドの卓抜な着想がぎっしりつまっている。特に国際貿易の比較優位説と、差額地代説のロジックはよくよく噛みしめるべきである。

共同幻想論

吉本隆明 著

●角川文庫/485円

戦後日本人のオリジナルな社会科学の業績として、まずこれに指を折るべきだろう。山村にひっそり暮らす人びとの「共同幻想」のあり方から天皇制の解明につき進む構築力は並みだいたいのものではない。

現人神の創作者たち

山本七平 著

●文藝春秋/品切れ

日本人はなぜ明治維新と日本の近代化に成功できたのか。その理由を、江戸儒学、特に山崎闇斎学派の思想に探っていく。尊皇思想の形成と変質が、明治以降の日本に深い影を落としていく車輪がよく判る。

社会学の基礎

今田高俊・友枝敏雄 編

●有斐閣/1,700円

若手の社会学者10人が、これまでの退屈な教科書をなんとかしようとして執筆した、大学教養課程の教科書。これ一冊で社会学をわかりたい人向き。私は「社会学と隣接諸科学」を担当しています。

経済学・哲学草稿

マルクス 著

●岩波文庫/553円

「資本論」のマルクスに対し、青年時代のマルクスを「初期マルクス」という。ヘーゲル哲学の影響を受け、社会の矛盾を新しいことばで考えぬいた、未刊の草稿。労働疎外や地球環境問題を考えたい人の必読書です。

「きめ方」の論理

佐伯 胖 著

●東京大学出版会/2,200円

民主主義の基本は投票。それがどんなにあやふやな基礎のうえに立っているか、「投票の逆理」のいろいろを紹介しながら説明していく。社会的選択理論という学問分野がありますが、そのもっとも手ごろな入門書です。

現代の預言者・小室直樹の学問と思想

橋爪大三郎 著

●弓立社/1748円

小室直樹氏は、私の先生。世間の誤解を正し、小室さんの学問がどこまでもまっとうで正統であることを紹介する本です。経済学、政治学、社会学……のつながりがわかって、社会科学に気軽に入門できる本。

冒険としての社会科学

橋爪大三郎 著

●毎日新聞社/1,262円

憲法を素材に、社会科学を考える筋道を一歩ずつ考える本。ヨーロッパ社会の伝統を、ユダヤ教・キリスト教の「神との契約」の思想に求め、その延長上に市民革命と近代社会を位置づけます。

私の読書 —読んで一言—

「夜明け朝明け」

住井すえ(新潮文庫)

苦しい生活を強いられながらも一生懸命に生き続ける一家に感動し、何度も涙を流した。今、いかに贅沢な事を考えている人が多いかを、認識させられる。中学以来の愛読書であり、自信をもってすすめられます。是非、御一読を……。 (早稲田大学/鈴木博)

「ぼくの美しい人だから」

G.サハヴィン(新潮文庫/640円)

正月に読んですっかり引き込まれてしまった本。好きになることは一つの選択であり、必然的に責任を伴うことだと思う。この小説は、全く背景の異なる2人が主人公である恋愛小説だが、恋愛を結果とせず、相手や自分を発見し、成長していくプロセスとしてとらえているため、読んでいて力がわいてくる。誠実に行動すれば、過去に関係なく誰でも幸せをつかめると思ったら元気になってきませんか。

(広島大学/玉木園子)